

卒業論文のころ

木村義之

文学部三年の秋は卒業論文の仮題目を提出する時期である。おそらく今も変わらぬスケジュールで動いていることと思う。わたしは卒論指導をぜひとも辻村先生にお願いしたいと心に決めていた。

そのころ、辻村先生のご担当科目の多くは大学院の授業にかたよっていて、学部生は三年生の「日本文学研究」という講義科目で初めて先生の敬語史のご講義に接することができたのであるが、その授業が国語学を専攻する決意を固めるものとなった。先生のご講義には多くの学生が登録していたから、卒論指導の希望者もさぞ多いだろう、自分はその中に入れるだろうか、と不安に思ってもいたが、仮指導の目には、わたしを含めて、たしか九人の学生が集まった。国語学で卒論を提出する学生は、他の分野に比べて少ないということの後になって知ったが、そうした傾向から考えれば、その年は比較的多くの学生が集まったということになる。

先生は当時文研委員長の要職にあり、国語審議会の

委員もなさっていたということをご講義の合間の雑談でうかがってはいた。しかし、先生のにこやかな表情や穏やかな話し方からは、そうした激務のまっただ中にいらつしやつることを全く感じさせないほど学生には気を配ってくださった。

四年生になると、先生の大蔵虎明本狂言を素材にした演習があり、わたしはその授業に出席していたが、卒論指導はその授業のあとになることが多かった。というよりは、わたしがまとわりついていたらというほうが正しいかもしれない。先生は「場所をかえましょうか」と、喫茶店に連れて行ってくださったり、夕方ちかくになると、今はなくなつたが、文学部近くの「いちふく」という食堂でごちそうしてくださったことも何度かあった。わたしは、研究室以外で先生にご指導いただくのは気がひける、ということを申し上げたことがあったが、先生は「わたし自身も金田一京助先生にくつついてまわって、金田一先生にはずいぶん教室の外でご指導をいただいたから、その恩返しを今の学生たちにしていくのですよ」とお話しになったことがある。岩本素白先生の偉大さを語っていただいたこともそのときであつたように思う。今考えると、お疲れのところをかなりの無理をされていらつしやつたのではないかと、心の痛む思いがする。

何度めかの夕食のうちに、興味本位で「先生の奥様

はお料理がおじょうずなのでしょうね」とうかがったことがある。先生は「そうねえ、家内は教育学部出身だから、特別料理を勉強したわけでもなく、最初はそうでもなかったけれど、だんだんじょうずになりましたね。たとえば・・・」とうれしそうに奥様のお料理についてお話しになったことを覚えている。

先生ご自慢の奥様に初めてお目にかかったのは、卒論提出後、例の九人を世田谷のお宅に招いてくださったときである。一月、世田谷ボロ市の日であった。先生は、卒論指導の学生をよくボロ市の時期にお宅にお招きになるということだった。ご自宅前で和服をお召しになった先生がわざわざお出迎えくださったことには恐縮してしまった。そのまま、ボロ市の人混みをかきわけるようにしながら、ご自宅のまわりを案内していただいた後、お宅にもどり、先生のご気性そのものといった書庫も披露してくださった。

夕食は奥様のお手料理である。わたしたち学生がござってそのおいしさを口にする、少し誇らしげなお顔で、いつにもましてにこやかになられた先生のお顔が印象に残っている。

さて、その年、わたしは修士課程の入学には失敗したが、人並みに卒業はすることができた。卒業式の日には専修別に分かれて、一人ひとり卒業証書を受け取るのがならわしだが、そこでの辻村先生のお言葉は、

「卒業」というのは、自動車の運転免許を取ったということにすぎない。免許を取った後、路上に出て、ドライバーとして事故なく一生を過ごすためには、日々の注意力と努力が必要である。だから「卒業」というのは、新たな出発なのだ。

という内容であった。その後、先生には大学院でも博士課程までご指導いただいた。

もとより比ぶべくもないが、今、大学というところに職を得て、学生をていねいに指導するということはとてもないエネルギーと深い学識が必要であると身にしみて感じるこのごろである。そのことはすなわち、先生の、研究者としての偉大さは言うまでもなく、教育者としての存在がいかに大きなものだったかを思い知らされることもある。そして、そのご恩が今日までの自分を支えてくださっていることに深く深く感謝するばかりである。

残念なことに、辻村先生にはもうご指導いただくことはできなくなってしまったが、今も卒業論文のころの先生のお姿とお声はわたしの心の中に宝としてしまいいこんである。

(きむら よしゆき／十文字学園女子大学専任講師)